

和語擬音語・擬態語の 各文法形式について

頼 錦 雀

東呉大学講師

【中文摘要】本文乃探討日語之和語擬聲詞・擬態詞的「～だ」「～な」「～の」「～。」形式之實態。首先，先考察和語擬聲詞・擬態詞中，何者具有上述各種文法形式，然後探究各形式的文法意義，最後再以對照語言學的手法，分析中、日兩國語之異同，以期對日本語教育有所貢獻。其中一部分並分析其結合價及深層構造。

本文綱目如下：

- 0 前言
- 1 「和語擬聲詞・擬態詞＋だ」
- 2 「和語擬聲詞・擬態詞＋な」
- 3 「和語擬聲詞・擬態詞＋の」
- 4 「和語擬聲詞・擬態詞＋。」
- 5 結語

【關鍵字】和語・擬音語・擬態語・結合價・對照分析

0 はじめに

和語擬音語・擬態語は、用法から見れば、いろいろな形式があるが、ここでは、

- 1 「和語擬音語・擬態語＋だ」

- 2 「和語擬音語・擬態語＋な」
- 3 「和語擬音語・擬態語＋の」
- 4 「和語擬音語・擬態語＋。」

の形式について、考察してみたい。

上の各形式の実態を究めて、中国語との対照分析によって、日中両国語の表現の異同を明らかにするのが、この論文のねらいであるが、ついでに、その考察した結果が、中国人学習者に対する日本語教育に役立つことを期する。

1. 「和語擬音語・擬態語＋だ」の形式

名詞、形容動詞には「～だ」という用法があるように、和語オノマトペにも「～だ」という述語のような用法がある。浅野鶴子編『擬音語擬態語辞典』の見出し語のうち、「～だ」形のあるものは101語あり、全体の12、59％にあたる。一体、どんなものにこの用い方があるのか、これを究明するのが、筆者のねらいである。

まず、「和語擬音語・擬態語＋だ」の類型から、見てみよう。

1.1 結合価から見た「和語擬音語・擬態語＋だ」の類型

「「体言＋格助詞」との関係でとらえる、いわゆる結合価」^❶から見た場合、「和語擬音語・擬態語＋だ」は次のような類型に分けられる。

- (A)和語擬音語・擬態語＋だ
- (B)名詞＋和語擬態語＋だ
- (C)名詞＋の＋和語擬音語・擬態語＋だ

(A)の「和語擬音語・擬態語＋だ」の類は、また次のように分析できる。

- (イ)主語が～だ。

❶『朝倉日本語新講座3』の付録2「日本語用言の結合価」。

- (ロ) 主語が対象が～だ。
 (ハ) 主語が対象を～だ。
 (ニ) 主語が対象・相手に～だ。
 (ホ) 主語が原因に～だ。
 (ヘ) 主語が比較の基準に～だ。
 (ト) 主語が評価の基準に～だ。
 (チ) 主語が比較の基準と～だ。
 (リ) 主語が経由点を～だ。
 (ヌ) 主語が原因で～だ。
 (ル) 主語が共同者と～だ。

筆者が浅野鶴子『擬音語・擬態語辞典』、天沼寧『擬音語・擬態語辞典』、藤田孝・他『和英擬音語擬態語翻訳辞典』、『小学館日中辞典』から取った「和語擬音語・擬態語＋だ」の例文を、荻野孝野氏の「日本語用言結合価」^②に載っている形容動詞と比べれば、下の表のように、両者は文型がずいぶん違うようである。

	「和語擬音語・擬態語＋だ」		荻野孝野氏の「日本語用言結合価」	
	異なり語数	%	異なり語数	%
主語が～だ。	70	77.77	4	7.27
主語が対象が～だ	1	1.11	4	7.27
主語が対象を～だ	1	1.11	3	5.45
主語が対象・相手に～だ	3	3.33	13	23.64
主語が原因に～だ。	1	1.11	0	0
主語が比較の基準に～だ	1	1.11	5	9.09
主語が評価の基準に～だ	3	1.11	11	20.00
主語が比較の基準と～だ	1	1.11	8	14.54
主語が経由点を～だ	1	1.11	0	0
主語が原因で～だ	7	7.77	0	0
主語が相手・共同者と～だ	1	1.17	7	12.73
合 計	90	100	55	100

②注①と同じ。

例を見てみよう。(但し、主語を表す「が」は主題化されたときは「は」となる。)

(イ) 主語が～だ。

- (1) …しこを踏んでもひざががくがくだったという。(『天』)
- (2) 陸路はがだがだです。(『擬』)
- (3) …のどがからからだ。(『擬』)
- (4) …部屋はがらがらだ。(『擬』)
- (5) …洗たく物は既にかちかちだ。(『擬』)
- (6) 都は…かんかんだ。(『天』)
- (7) …パパはぐったりだが、…。(『天』)
- (8) …おやはげーげーだ。(『天』)
- (9) (芋) 中がごりごりだ。(『擬』)
- (10) ここの雪はさらさらだ。(『擬』)
- (11) 母の手は荒れてばりばりだった。(『天』)
- (12) 朝から御馳走せめでおなかがばんぱんだ。(『擬』)

(ロ) (主語が) 対象が～だ。

- (13) 英語はぺらぺらだが、日本語はまるでだめー。(『擬』)

(ハ) (主語が対象を)～だ。

- (14) 「お酒は?」「がぶがぶです」(『天』)

(ニ) 主語が相手に～だ。

- (15) Zは試合からしばらく遠ざかっていたため動きが鈍く、激しい当たりを見せるSにたじたじだった…。(『天』)
- (16) 気の強いことを言うくせに、女房にでれでれで…。(擬)
- (17) あいつは上役にべったりだ。(『小』)

(ホ) 主語が原因に～だ。

- (18) …Sの追い込みにあっぶあっぶでした。(『天』)

(へ) 主語が比較の基準に～だ。

(19) 父親にそっくりだ。(『小』)

(ト) 主語が評価の基準に～だ。

(20) おやじの帽子はぼくにはみんながぼがぼだ。(『擬』)

(21) わたしにはだぶだぶだ。(『小』)

(22) こうした役はあの女優にぴったりだ。(『擬』)

(チ) 主語が比較の基準と～だ。

(23) 成績の点では兄貴とちょぼちょぼだから…。(『擬』)

(リ) 主語が経由点を～だ。

(24) いつも食うこととおもしろいこととの間をうろうろですよ。(『天』)

(ヌ) 主語が原因で～だ。

(25) 彼の退団でチームはがだがだだ。(『擬』)

(26) 来る電車はどれも行楽帰りの人できちきちだ。(『天』)

(27) 長雨で運動場もぐちゃぐちゃだ。(『擬』)

(28) 風の中を行進したので、口の中が砂でざらざらだ。(擬)

(29) …体じゅう汗でねとねとだ。(『擬』)

(30) 売れ行きが不振でせっかくの投資もぱーだ。(『擬』)

(31) 汗で背中がびしょびしょだ。(『擬』)

(ル) 主語が共同者と～だ。

(32) さあ、パパといっしょにぼちゃぼちゃですよ。(『擬』)

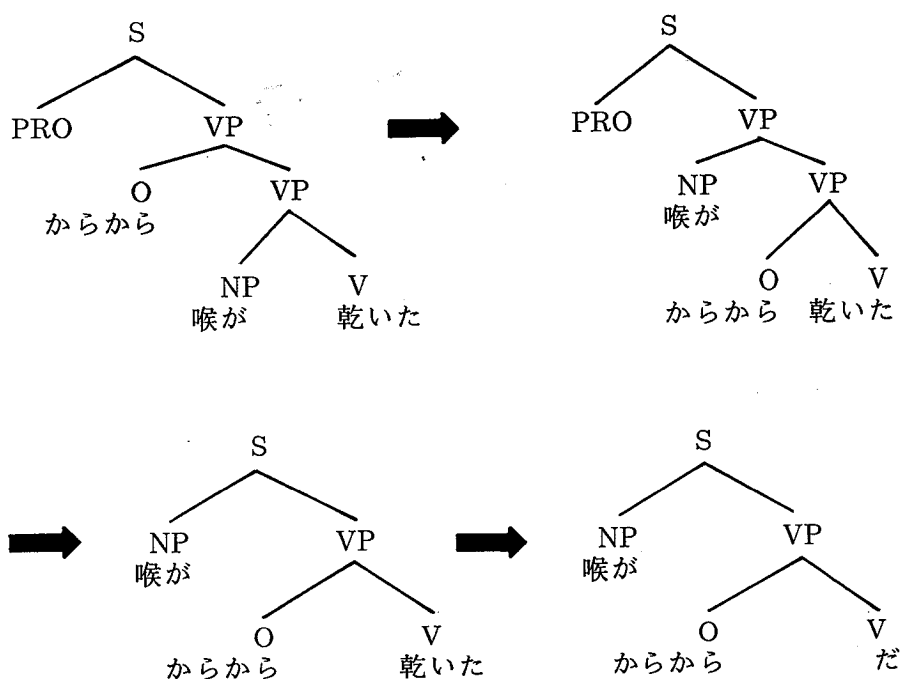
荻野孝野氏の「日本語用言結合価」表では、「主語が対象・相手に～だ」形式のものが一番多く、全体の 23.64 % を占めている。それに対して、筆者が浅野鶴子『擬音語・擬態語辞典』、天沼寧『擬音語・擬態語辞典』、藤田孝・他『和英擬音語擬態語翻訳辞典』、『小学館日中辞典』から取った「和語擬音語・擬態語+だ」の例文では、「主語が～だ」形式のものが全体の 77.77 % を占めていて、一番多い。そして、「主語が原因に～だ」、「主語が経由点を～だ」および「主

語が原因で～だ」形式は、荻野孝野氏の「日本語用言結合価」表には見られない。

以上の文の構造は、次のように図示して良からう。(PROは動作主・主語を、Sは文を、Oは擬音語・擬態語を、Vは動詞を、VPは動詞句、NPは名詞句を表わす)

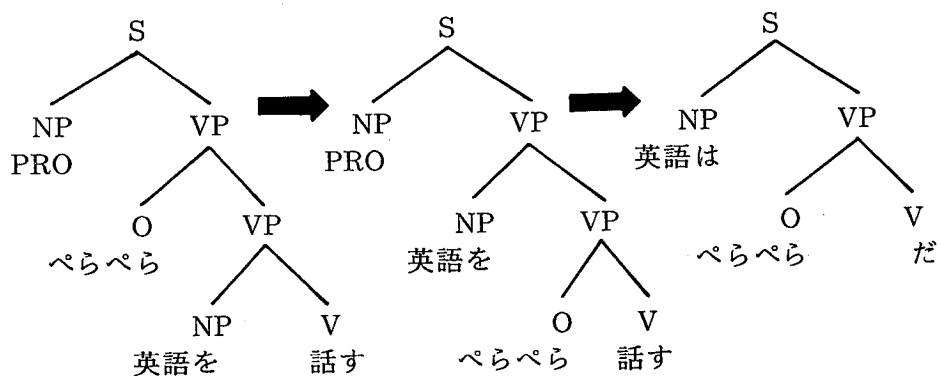
(イ) (全体主語が部分) 主語が～だ。

例：喉がからからだ。



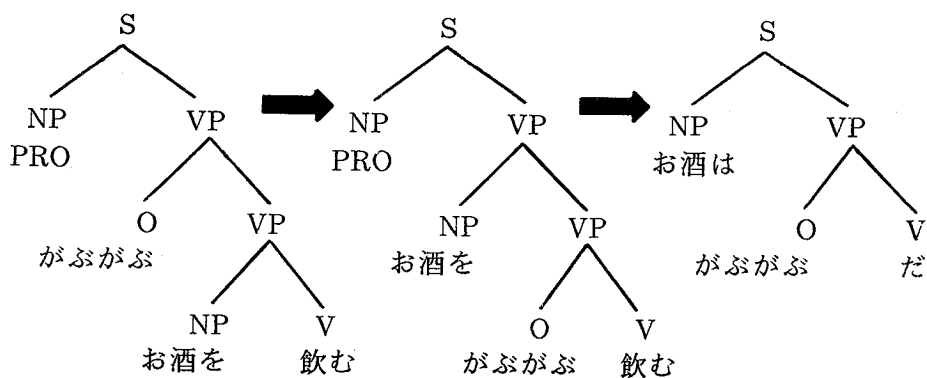
(ロ) 主語が対象が～だ。

例：英語はぺらぺらだ。



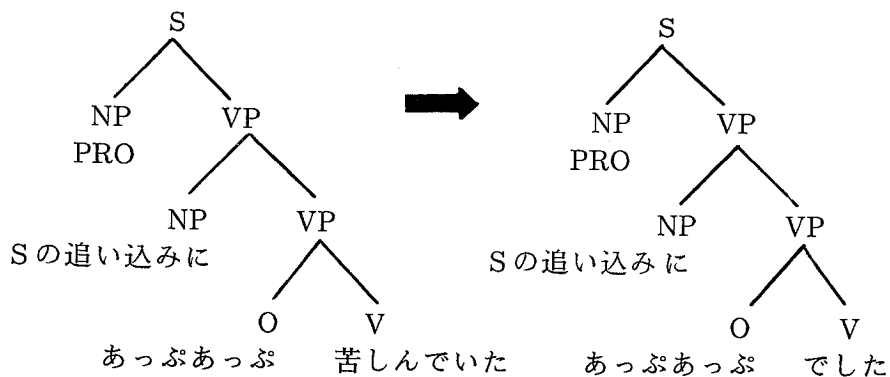
(ハ) 主語が対象を〜だ。

例：「お酒は？」「がぶがぶだ」



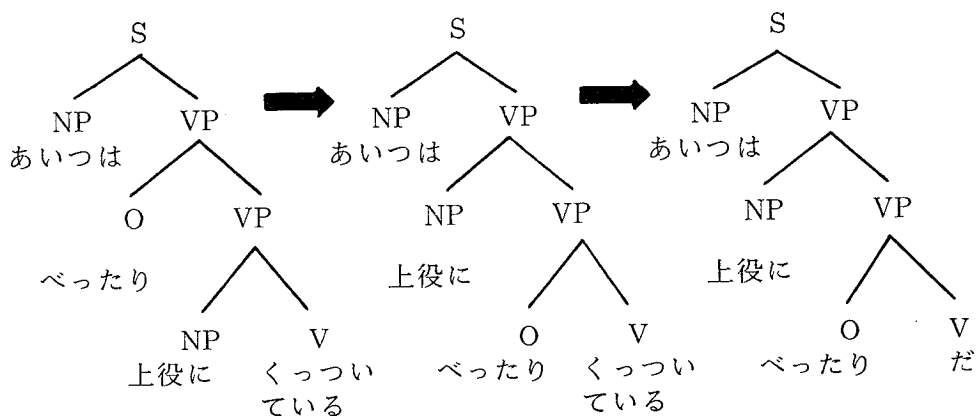
(ニ) 主語が原因に〜だ。

例：Sの追い込みにあっぱあっぱでした。



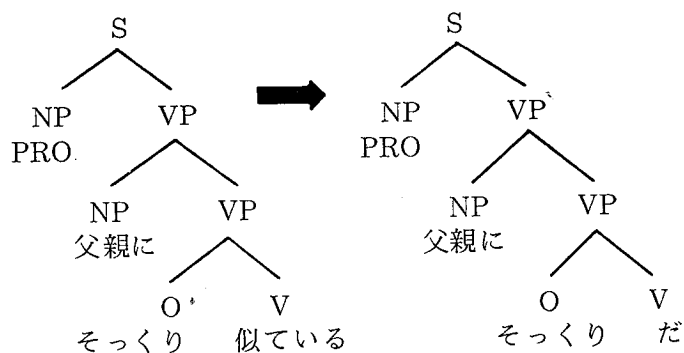
(ホ) 主語が相手に～だ。

例：あいつは上役にべったりだ。



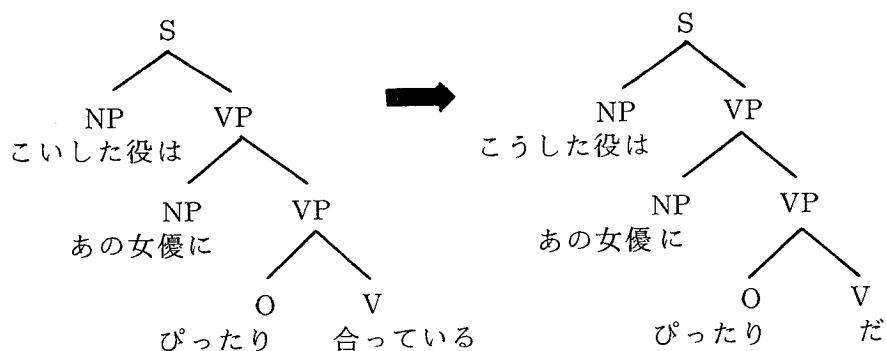
(ヘ) 主語が比較の基準に～だ。

例：父親にそっくりだ。



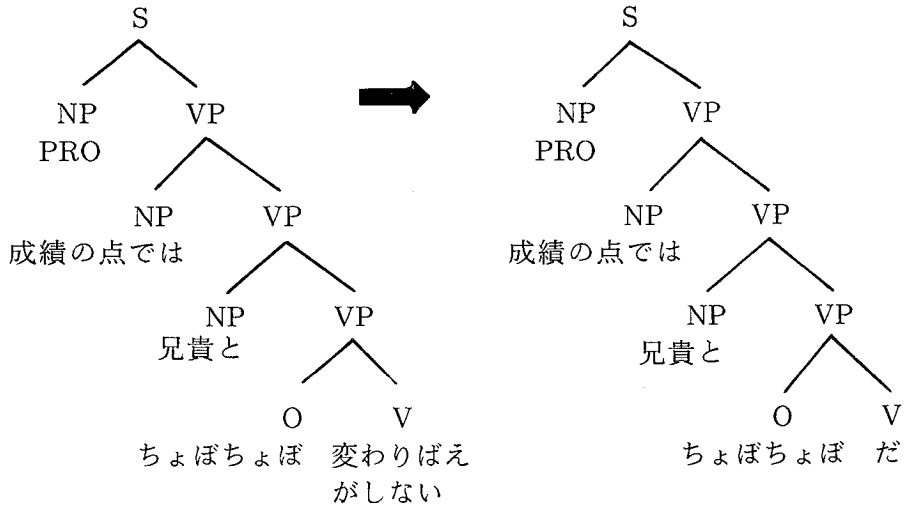
(ト) 主語が評価の基準に～だ。

例：こうした役はあの女優にぴったりだ。



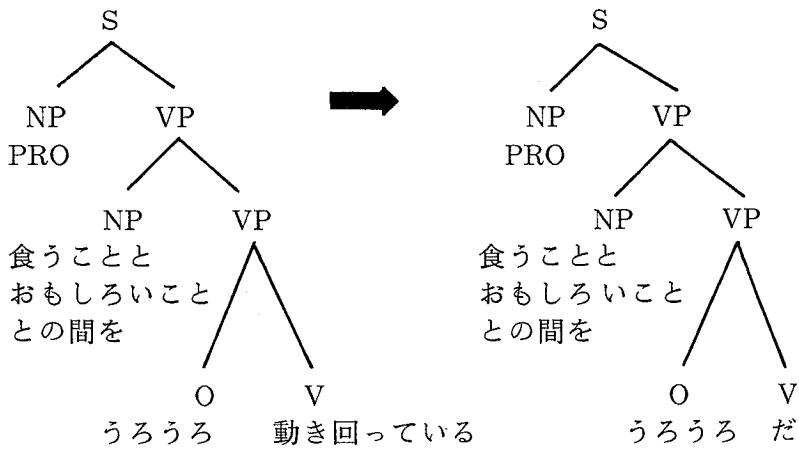
(チ) 主語が比較の基準と～だ。

例：成績の点では兄貴とちょぼちょぼだ。



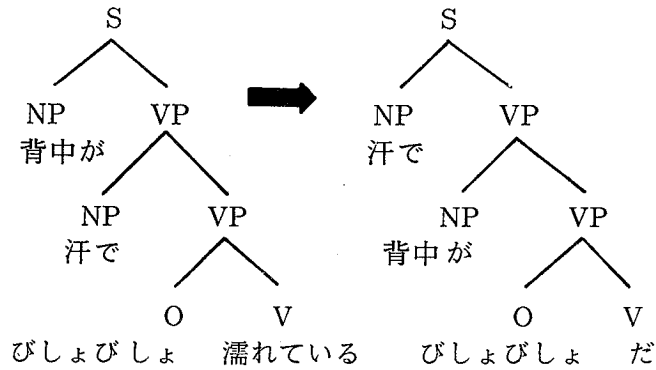
(リ) 主語が経由点を～だ。

例：食うこととおもしろいこととの間をうろうろです。



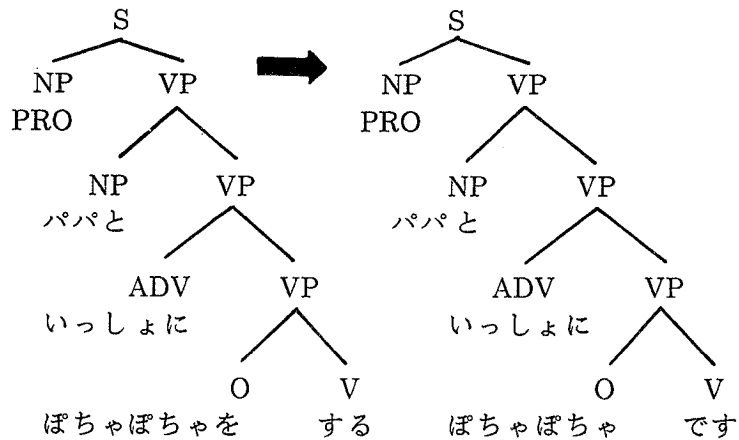
(ヌ) 主語が原因で〜だ。

例：汗で背中がびしょびしょだ。



(ル) 主語が共同者と〜だ。

例：パパといっしょにぼちゃぼちゃです。



以上の図形で分かるように、「和語擬音語・擬態語+だ」の「だ」は述語の代用化変形である。

(B)の「名詞+和語擬態語+だ」形には、次のような例がある。

[33] 十万円かすかすで妻子を養っていくのは大変なことだ。(『擬』)

[34] …私の体重は標準体重かっきりです。(『擬』)

[35] 地面が海面すれすれで…。(『小』)

[36] 笑うとお父さんそっくりですよ。(『擬』)

(37) 帆船、人形、いそづりなど凝ったものから、かめやかえるなどは愛きょう
うたっぶりである。（『天』）

(38) …女房は不平たらたらだ。（『擬』）

(39) いま地元ではU氏の支持者は大にここにこである。（『天』）

(40) 汗びっしょりなのだ。（『天』）

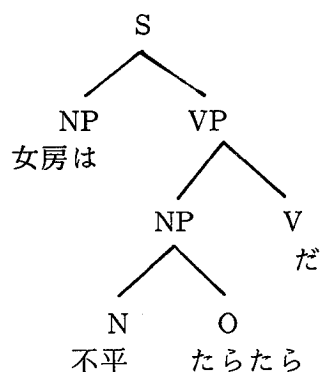
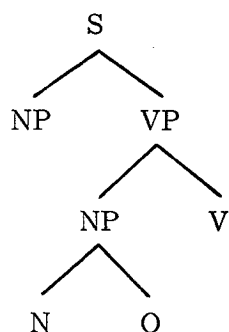
(41) いつ見破られるかと、内心ドキドキでした。（『擬』）

(42) 「それで安心した。痛いんじゃないかと内心ひやひやだった」と告白。
（『天』）

(43) （（さらしを腹に巻いて出歩いたら））シュミチョロならぬ腹巻きひら
ひらなのです。（『天』）

上の例で見たように、「名詞＋和語擬態語＋だ」形式の擬態語は、数量（〔33〕〔34〕〔38〕例）、程度（〔35〕〔37〕例）、状態（〔39〕〔40〕〔41〕〔42〕〔43〕例）を表すのである。その構造を図示すれば、次のようになる。

例：女房は不平たらたらだ。



©の「体言／副詞＋の＋和語擬音語・擬態語＋だ」形には、次のような例が見られる。

(44) ぼくの家もかなりのがだがだがね。（『天』）

(45) …どこものろのろ運転で、見たのは、新緑ならぬ、前の車のテールランプのちかちかだった。（『天』）

(46) 彼は江戸っ子のちゃきちゃきだ。(『和英』)

(47) なるほどカラフルで、騒々しくて、薄っぺらのへなへなで、おもちゃ売り場のようだった。(『擬』)

(48) このまんじゅうは、出来立てのほかほかです。(『擬』)

(49) 彼は大学出たてのほやほやだから、仕事をそんなに期待するのは無理だよ。(『擬』)

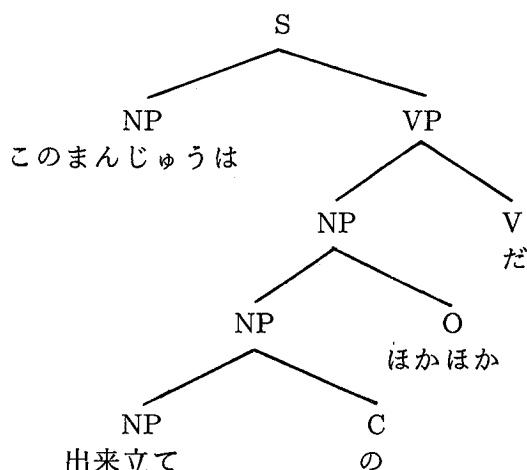
(50) この服は新調したてのほやほやなんだ。(『擬』)

(51) 一つ、ためしてみてください。しぼり立てのほやほやです(『和英』)

(52) かげろうのゆらゆらで、標的の観測が妨げられる。(『天』)

上の例文で見た擬態語は、すべて状態を表すものである。その構造は次のようである。

例：このまんじゅうは、出来立てのほかほかです。



1.2 和語擬態語にも和語擬音語にも「～だ」の形式がある。

擬音語と擬態語との区別は、人によって、文脈によって明確に立てられることが難しいが、筆者が考察した例文では、擬態語にも和語擬音語にも「～だ」の形式がある。但し、擬音語のほうは純粹の、声音を表わす語ではない。例えば、

(53) うちの子は弱虫でね、何かというとすぐにあーんだ。(『擬』)

(54) あいつ泳げないんだぜ。水に落ちたらたちまちあっぱあっぱだ。(『擬』)

(55) いまでも、交通は海路が便利で、沼津から船で50分。海岸沿いの陸路はがたがたである。(『天』)

(56) 「…一日がかりになるいうて、皆ふうふうですわ」(『和英』)

の「あーん」「あっぱあっぱ」「がたがた」「ふうふう」には擬音語の用法もあるが、ここでは例文で見たように、擬音語ではなくて擬態語である。

音声を表わすオノマトペには、名詞への転用の現象がある^③。例えば、「M子ちゃんのおみやげは、こんなきれいながらがらですよ」(『天』)の「がらがら」は擬音語から転用されたおもちゃの名である。このような語にはすべて「～だ」の形の用法がある。しかし、こんな転用されたものは、みなもとはオノマトペだと言っても、もう純粹の音声を表わす語とは言えないと思う。

1.3 「～っ」形式のものには、「～+だ」の用法がないようである。

筆者の考察によれば、浅野辞典の見出し語で「～っ」形式のものには、「～+だ」の用法があるのは1語もないようである。これは、強烈さを表す、促音で終わる和語オノマトペには「だ」が付きにくい、ということをしているのであろう。

但し、筆者が取った例文には、「かっかっ」「ぶっっ」には、後述のように、「～。」という用法が見られる。これは、促音で終わる和語オノマトペが「だ」を用いられなくても、それ自体で強烈さ、急激さを表わすからである。

1.4 「〇〇り」形には「和語擬態語+だ」の用法がないようである。

三音節で「り」で終わる「〇〇り」形式のオノマトペは、「～っ」形式と同じように、「～+だ」の用法がないかわりに、「～。」の用法がある。これは、「〇〇り」形式のものは一回的な表現で、感性的な性格があり、述語の代用形である「だ」を用いられなくても、それ自体で臨場的な表現が表れているからだと

③ 頼錦雀「中国語と対照する日本語の擬音語」を参照されたい。

思う。

そして、「うんざり」「がっくり」「ぐったり」「そっくり」などは、「り」で終わるものだから、一回性のものでないから、「～だ」形式の用法が見られる、例えば、

(57) 未練どころか、もううんざりである。(『和英』)

(58) 「3人で15日間もかかって植えたのに」と1日じゅうがっくりであった。
(『天』)

(59) 人いきれに子どもをかかえたパパはぐったりだが……。 (『天』)

(60) 笑うとお父さんそっくりですよ。(『擬』)

1.5 「～(と)＋述語」形式を有する和語オノマトペは、必ずしも「～だ」形式があるとは限らない。

「和語擬音語(と)＋述語」の形式だけでなく、「和語擬態語(と)＋述語」形式のうちにも「～だ」形式の用法がないものがある。例えば、前に述べた「～っ」形式のものおよび「○○り」形式のものはその例である。

??がさった。

??ぎくった。

??しっしだ。

??しゃきだ。

??すかだ。

??じろだ。

??だらりだ。

??ころりだ。

??ぶらりだ。

??ぽかりだ。

1.6 「～に」形式を有する擬態語には「～だ」か「～です」形式のあるものが多い。

「～に」形式を有する擬態語には「～だ」形式のあるものがある。例えば、

(61) 街はぼくを、くたくたに疲れさせてしまうのだ。(『和英』)

(61') 私、歩いているだけだって、くたくただわ。(『和英』)

(62) 多摩の畑も山道もいつもの冬ならからからにかわいて白っぽく見えるのに……。 (『天』)

(62') 大声で応援したため、のどがからからだ。(『擬』)

(63) ぬかるみで転んだものだから、服がべちゃべちゃに汚れてしまった。

(『擬』)

(63') 墨汁をひっくり返したので、手習い半紙がべちゃべちゃだ。(『擬』)

(64) …腹がぺこぺこになったよ。(『擬』)

(64') 「第一、もうお腹がぺこぺこでしょう」(『和英』)

(65) ……家計は成り立つはずだが、ぴーぴーになってゆく。(『天』)

(65') ぴーぴーだからカンパはかんべんしてくれ。(『擬』)

(66) 洗濯物なんかも、外へ出したとたんにがばがばに凍ってしまいます。

(『擬』)

(66') 君はずいぶん大頭だね、この帽子は私にはがばがばだ。(『和英』)

但し、筆者の考察では、「に」形式を有する擬態語には「～だ」形式のないものもあるようである。例えば、

(67) ころころに切ったっていい。(『天』)

(67') *切ったものはころころだ。

(68) 深い霧の中を歩いてきたので、着ているものがじとじとに湿ってしまった。(『擬』)

(68') *着ているものが湿ってしまってじとじとだ。

(69) ロープがずるずるにほどけて荷が転げ落ちた。(『擬』)

(69') *ロープがほどけてずるずるだ。

(70) たとえばタブロイド版である。……私どもの会社ではへん平活字を発明して15字詰めにし、ぎしぎしに組んでいる。(『天』)

(70') *15字詰めにして、ぎしぎしだ。

のように、「ころころ」「じとじと」「ずるずる」「ぎしぎし」などには、「～に」形式の用法があるが、「～だ」形式の用法が見られないのである。

1.7 「～だ」形式を有する擬態語には必ずしも「～に」形式があるとは限らない。

渡辺実氏は、いわゆる形容動詞は、状態副詞と指定助動詞との結合が緊密になって生まれた用言にほかならない、というように指摘している^④が、この説によれば、「～だ」形式は形容動詞だということになる。だが、「～だ」形式を有する擬態語には必ずしも形容動詞の連用修飾形に当たる「～に」形式があるとは限らないようである。筆者の考察によれば、

(71) いつも、食うこととおもしろいこととの間をうろうろですよ。(『天』)

(72) …もっと楽に勝てると思っていたのに、後半 S の追い込みにあっぶあっぶでした……。 (『天』)

(73) いま地元では U 氏の支持者たちが大にこにこである。(『天』)

(74) かめみたいのにのろのろでもいいから歩こう……。 (『天』)

(75) このまんじゅうは、出来たてのほかほかです。(『擬』)

のような「うろうろ」「あっぶあっぶ」「のろのろ」「ほかほか」には、「～に」形式の用法が見られないようである。

これは、形容動詞の連用修飾形は

(イ) つぎの動詞の表わす動作の行われるようすを表わす、

(ロ) つぎの動詞の表わす動作の結果のようすを表わす、

(ハ) 考えたり感じたりした内容を表わす、

という用法がある^⑤のに対して、「和語擬態語+に」の「に」が前に述べたように、「結果状態を表わす」用法しかないからだと思う。

1.8 「～+だ」形式を有する和語擬態語には、「～で」形式の用法があるものが多い。

「和語擬態語+だ」形式には、中止形の「～で」形式の用法があるものが多い。例えば、

④渡辺実「品詞論の諸問題」を参照。

⑤『文法教育』ペ 200、201 を参照。

(76) この夏みかんはかすかすですで少しもうまくない。(『天』)

(77) 雪のかたまりはこちこちです石のよう。(『天』)

(78) 政府が業界とべったりでは思い切った処置がとれるわけがない。(『擬』)

(79) ……選手もへとへとで、口もきけないほどだった。(『擬』)

(80) なるほどカラフルで、騒々しくて、薄っぺらのへなへなで、おもちゃ売り場のようだった。(『天』)

但し、次のような用法で用いられるものには、「～で」形式の用法がないではないかと思われる。

(81) …もううんざりだ。(『天』)

(81') …もううんざりで…。

(82) 「お酒は？」「がぶがぶです」(『天』)

(82') 「お酒は？」「がぶがぶで…」

これは、「だ」が動詞の代用形であるからだと思う。詳しいことは、あとで述べることにする。

1.9 「～だ」形式を有する和語オノマトペには、視覚・触覚に関するものが多い。

筆者の考察によれば、嗅覚に関するものには「～だ」形の用法が見られない。そして、前に述べたように、聴覚に関するもの——擬音語には「～だ」形式を有する語があるが、それは事物の名や状態に転用されたものである。ほかに、視覚、触覚、感情、数量に関するものがある。それを羅列すると、次のようである。

◎聴覚に関するもの

どすんどすん ひそひそ げーげー ぼちゃぼちゃ
れろれろ

◎視覚に関するもの

あーん あっぷあっぷ うろうろ がくがく
がたがた がぼがぼ がぶがぶ がぼがぼ ぐずぐず
くたくた にこにこ ばらばら びかびか ぐったり

だぶだぶ　ちかちか　ちぐはぐ　どろどろ　ひらひら
ふうふう　ぶよぶよ　ふらふら　ぶるぶる　へとへと
へなへな　へろへろ　ぼいん　ぼさぼさ　ほやほや
ぼちゃぼちゃ　めためた　ゆらゆら　よぼよぼ

◎触覚に関するもの

かすかす　かちかち　からから　がらがら　かりかり
こちこち　ごちごち　ごりごり　ごわごわ
ぐちゃぐちゃ　さらさら　ざらざら　すべすべ
ねとねと　ばりばり　びしゃびしゃ　びしょびしょ
びちゃびちゃ　びっしょり　ふかふか　ぶかぶか
べちゃべちゃ　べとべと　ほかほか　ほかほか

◎心理・感情に関するもの

うんざり　がっくり　かんかん　でれでれ　ドキドキ
にこにこ　びくびく　ひやひや　けちょんけちょん
たじたじ　ちゃきちゃき　ぶんぶん　べったり
ほくほく　めろめろ　やきもき

◎数量・容積・限度に関するもの

かすかす　かつかつ　かっきり　きちきち
ちょぼちょぼ　ちらほら　すかすか　すれすれ
たっぷり　たらたら　ぼつぼつ

◎いろいろな状態に関するもの

ぱー　ぱんぱん　ぴーぴー　ぴったり　さっぱり
すんなり　そっくり　ほやほや　ぺこぺこ　ぺらぺら

その中で一番多いのは、視覚に関するものである。視覚に関するものに次いで多いのは、触覚に関するものである。それから、聴覚に関するものおよび数量・容積・限度に関するものもある。

1.10 文末の形から見た「和語擬音語・擬態語＋だ」

文末の形から見れば、「和語擬音語・擬態語＋だ」形式の表現がいろいろある。その表現の種類を分けて見よう。

(イ) 断定の非過去形の常体肯定表現

(例) うちの子は弱虫でね、何かというとすぐにあーんだ。

(ロ) 断定の非過去形の敬体肯定表現

(例) 陸路はがたがたです。

(ハ) 断定の過去形の常体肯定表現

(例) ゆうべは酔っぱらってめためただった。

(ニ) 断定の過去形の敬体肯定表現

(例) …Sの追い込みにあっぶあっぶでした。

(ホ) 断定の強調の意味を表わす表現

(例) 笑うとお父さんそっくりですよ。

(ヘ) 軽い主張を表わす表現

(例) 「…一日がかりになるいうて、みんなふうふうですわ」

(ト) 推量の表現

(例) 「第一、もうお腹がぺこぺこでしょう」

筆者が取った標本には、否定の表現の例は一つも見られない。これは、たぶん、

○何かというとすぐにあーんと泣き出す。

→何かというとすぐにあーんだ。

○予定がびっしり詰まっている。

→予定がびっしりだ。

のように、擬音語・擬態語がある既成事実の音声か状態を修飾するものであり、そして、「だ」がその述語の代用形だからであろう。ここから見れば、和語擬音語・擬態語のあとにくる「だ」は、やはり普通の体言のあとにくる「だ」とは、ちょっと違うと思われる。

1.11 品詞論から見た「和語擬音語・擬態語＋だ」

上で考察した通り、「和語擬態語＋だ」には「和語擬音語・擬態語＋だ」「名詞＋和語擬態語＋だ」「名詞＋の＋和語擬音語・擬態語＋だ」という三つの種類がある。「和語擬音語・擬態語＋だ」は活用では必ずしもすべて形容動詞とは同じでないにもかかわらず、品詞論的には形容動詞と考えていいと思う。というのは、「和語擬態語＋だ」の類は、客体的素材概念だけでなく、主体的叙述活動をも表わすものであり、そして、その活用が形容動詞に近いからである。「名詞＋和語擬態語＋だ」の類は、接尾語としてよいと思う。そして、「名詞＋の＋和語擬音語・擬態語＋だ」の類は、名詞としてよかろう。

1.12 中国語との対照分析

「和語擬態語＋だ」に対応する中国語は多様多彩である。

(83) よく煮たつもりだが、この芋はまだがりがりだ。(『擬』)

(我以為已經煮了，但是這個芋頭還是硬硬的。)

(84) 朝早いので電車はがらがらだ。(『小』)

(因為很早，電車裏空空的。)

(85) このまんじゅうは、出来立てのほかほかです。(『擬』)

(這饅頭剛出爐熱呼呼的。)

(86) 長雨で運動場もぐちゃぐちゃだ。(『擬』)

(由於久雨運動場濕答答的。)

(87) 雨で髪がびしょびしょだ。(『例』)

(因雨頭髮濕淋淋的。)

(88) 両手がべたべただ。(『永』)

(兩隻手都黏糊糊的。)

(89) あの会社はがたがただ。(『小』)

(那家公司千瘡百孔。)

(90) このパンは大変すかすかだ。(『最』)

(這個麵包很暄。)

(91) 未練どころか、もううんざりである。(『和英』)

(什麼戀戀不捨，已經膩了。)

(92) あいつ泳げないんだぜ。水に落ちたらたちまちあっぱあっぱだ。(『擬』)

(那傢伙不會游泳吔！掉到水裏馬上咕嚕咕嚕水)

(93) 「……皆ふうふうですわ」(『和英』)

(……大家都氣喘吁吁。)

(94) うちの子は弱虫でね、何かというとすぐにあーんだ。(『擬』)

(我們家孩子是個胆小鬼。動不動就哇哇大哭。)

(95) のどがかわいてからからだ。(『小』)

(嗓子渴得冒烟了。)

(96) 成績が落第すれすれだ。(『詳』)

(成績是及格邊緣。)

上の例文と訳文を対照して見れば、次のことが言えよう。

(ア) 感性的な「和語擬態語＋だ」という表現が、中国語では感性よりも理性的な表現になる。

「がらがら」のような、事物の名に転用されたものを除いた「和語擬態語＋だ」に対応する中国語訳は、〔83〕〔84〕例では「疊語による擬態語＋的」(「硬硬的」「空空的」)に、〔85〕～〔88〕例では「ABB型の擬態語＋的」(「熱呼呼的」)「濕答答的」「濕淋淋的」「黏糊糊的」)に、〔89〕例では四字熟語の「千瘡百孔」に、〔90〕〔91〕例では形容詞(「暄」「膩」)に、〔92〕～〔94〕例では擬音語か擬態語による動詞句(「咕嚕咕嚕水」「氣喘吁吁」「哇哇大哭」)に、〔95〕例では動詞句(「冒烟了」)に、〔96〕例では名詞句(「及格邊緣」)になっている。このように、日本語の「擬態語＋だ」という感性的な表現が、中国語では感性よりも理性的な表現になるわけである。

(イ)「擬態語+だ」のまえにも、「擬態語+だ」に対応する中国語の前にも副詞の修飾語がくる。

「まだがりがりだ。(還是硬硬的。)」 「もううんざりである。(已經膩了。)」 というように、日本語の擬態語の前にも、日本語の擬態語に対応する中国語の前にも副詞の修飾語がくる。

(ウ) 日本語には「名詞+の+擬態語」形式があるが、中国語にはそのような用法がない。例えば、

○このまんじゅうは、出来立てのほかほかです。(『擬』) (這饅頭剛出爐熱呼呼的。)

2. 「和語擬音語・擬態語+な」の形式

1で見た「～だ」形式は、いろいろな面で形容動詞と似ているが、その連体修飾としてののはたらきはどうか。

形容動詞には「～な」という連体修飾形があるから、和語オノマトペの「～だ」形式にも「～な」という連体修飾形があると思うがちだろうが、しかし、実はそうでもないようである。次は、「和語擬音語・擬態語+な」について見てみよう。

筆者の考察では、「和語オノマトペ+な」の用法は、次のようである。

(イ) 和語オノマトペ+な+名詞

(ロ) 和語オノマトペ+な+の+助詞

(ハ) 和語オノマトペ+な+のだ。

(ニ) 和語オノマトペ+な+助詞

2.1 和語オノマトペ+な+名詞

(97) 生乾きの氷嚢のようにべろべろな膜になった。(『和英』)

(98) 紅葉祭の人たちの中に、私はちぐはぐな気持ちでいた。(『和英』)

(99) ……かすかすな声を絞り上げた。(『和英』)

(100) …この子がやると、凄く大きいや小さいや、目茶苦茶な形になった。(『和英』)

(101) あぶらのないかさかさなほお。(『天』)

(102) きょうは、そのぐにゃぐにゃな半熟料理のうち…(『天』)

(103) イーストと調味料のちょっとした加減でほかほかなパンにならないなど、にがい経験をもつ人もあるはず。(『天』)

上の例文での「べろべろな膜」「ちぐはぐな気持ち」「かすかすな声」「目茶苦茶な形」「かさかさなほお」「ぐにゃぐにゃな半熟料理」「ほかほかなパン」は、「和語オノマトペ+な+名詞」という形式になっている。『浅野辞典』、天沼寧編『擬音語・擬態語辞典』および『和英擬音語・擬態語翻訳辞典』に例文が見られるのは、この7語しかない。この点、いわゆる形容動詞とはずいぶん違うのである。

筆者の考察では、下の表のように、上の7語のうち、「ちぐはぐ」「べろべろ」「目茶苦茶」は連帯修飾成分としてのはたらきをするとき、いつも「～な」形で用いられる。つまり、形容動詞的である。

	～なN	～したN	～としたN	～するN	～とするN	～しているN	～としているN	～のN
かさかさ	○	○	○	○		○		
かすかす	○				○	○		○
ぐにゃぐにゃ	○	○				○		○
ちぐはぐ	○							
べろべろ	○							
ほかほか	○			○				
目茶苦茶	○							

2.2 和語オノマトペ+な+の+助詞

「和語オノマトペ+な」形式は、連帯修飾成分として名詞を修飾するほか、助

詞に連なることもある。

(104) いくら双子でもあれほどそっくりなのは珍しい。(『擬』)

(105) ……安物は困る。ぺらぺらなのは、もっといけない。(『和英』)

(106) 株高でほくほくなのは実は銀行。(『天』)

(107) こわした物とそっくりなのを返せという無理難題。(『擬』)

[104] 例の「の」と [105] ～ [107] 例での「の」とは、性質がちょっと違う。

[104] 例の「の」は「こと」、つまり、「いくら双子でもあれほどそっくり」だという現象を指しているのに対して、[105] ～ [107] 例での「の」は本当の「物」を指しているのである。言い換えれば、[105] ～ [107] 例の用法は 2.1 のと同じだが、[104] 例の用法は 2.1 のと違うのである。

こんな例もととても少ないようで、『浅野辞典』、天沼寧編『擬音語・擬態語辞典』および『和英擬音語・擬態語翻訳辞典』にでたものは上の 4 例しかない。

2.3 和語オノマトペ+な+のだ。

「和語オノマトペ+な」形式には、「～のだ」の形で用いられることが見られる。例えば、

(108) がんこでかちかちなんだから。……。 (『擬』)

(109) この用紙は人数分きちきちなんだから、君にだけ余計にあげるわけにはいかないよ。(『擬』)

(110) あの人、五か国語がぺらぺらなんですって。(『擬』)

(111) この服は新調したてのほやほやなんだ。(『擬』)

(112) 私は幼いときから、乗り物酔いがはげしかった。負うた子が背ではしゃいでいるのに、親の私はげーげーなのだ。(『天』)

(113) …収支決算をすれば、結局両者はちょぼちょぼなのだ、という教え。(『天』)

(114) 柄の裏に「N」という名まえがきざまれ、まるでいまも使っているようにぴかぴかなのだ。(『天』)

(115) …あまり暑いので、目がさめた。汗びっしょりなのだ。(『天』)

上の例文で見たように、「和語オノマトペ+なのだ」は、文末に来て、話し手がある状態に対する説明を与えるのである。「の」が「ん」に、「だ」が「です」になることもある。

「～だ」形を有する和語擬態語は、敘述力を持っている述語であるから、形容動詞と同じく、「～なのだ」という用法があると判断して良からう。

2.4 和語オノマトペ+な+助詞

形容動詞に「～な+助詞」の用法があるように、和語擬態語にもこの用法がある。例えば、

(116) この生地は、一度洗たくするとひどく縮むから、仕立てはがばがばなぐらいにしておいたほうがよい。(『天』)

(117) 道路工事も一度にやればいいのに、…管轄がばらばらなので、何度も掘りかえさねばならぬことになる。(『擬』)

(118) この地方の雪はぼたぼたなのでスキーには向きません。(『擬』)

但し、『浅野辞典』、天沼寧編『擬音語・擬態語辞典』および『和英擬音語・擬態語翻訳辞典』を調べたら、「和語オノマトペ+な+助詞」の例は上の三つしか見られないが、これも2.3に述べたものと同じように、「～だ」形を有する和語擬態語にはすべてこの用法があると考えられる。

2.5 「～+な」形式と中国語との対照分析

2.1 で見た例文を中国語と対照比較してみよう。

(119) 生乾きの冰囊のようにべろべろな膜になった。(『和英』)

(像半乾的冰袋似地，變成了軟扒扒的膜。)

(120) 紅葉祭の人たちの中に、私はちぐはぐな気持ちでいた。(『和英』)

(我懷著異樣的心情處在紅葉祭的人潮中。)

(121) ……かすかすな声を絞り上げた。(『和英』)

(……勉強喊出乾巴巴的聲音。)

(122) …この子がやると、凄く大きいのや小さいのや、目茶苦茶な形になった。
た。（『和英』）

（…這孩子做的話，就變成很大的或很小的，亂七八糟的形狀。）

(123) あぶらけのないかさかさなほお。（『天』）

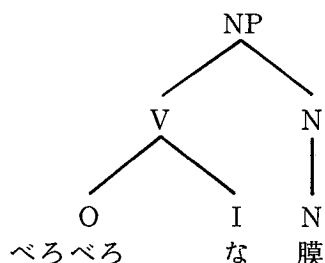
（沒有油脂的乾巴巴的臉頰。）

(124) きょうは、そのぐにゃぐにゃな半熟料理のうち…（『天』）

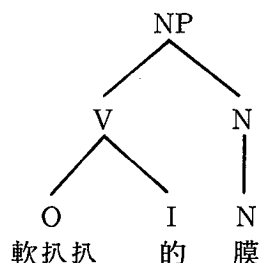
（今天，就從這個軟綿綿的半熟料理当中…。）

これらの例文を中国語訳と対照して見れば分かるように、日本語の「擬態語＋
な＋名詞」は中国語の「擬態語＋的＋名詞」と対応している。図示すると、次の
ようになる。

日本語：



中国語：



3. 「和語擬音語・擬態語＋の」の形式

2で見たように、和語オノマトペには、「～な」形式という連体修飾形のある
例があまり見られない。が、そのかわり、「～の」形式で名詞を修飾するたらし
きをするものがよく見られる。例えば、

(125) 赤字がふえるばかりで、毎月あっぱあっぱの状態です。（『天』）

(126) 赤電話はどこもいらいらの長い行列が続いた。（『天』）

(127) 国鉄うはうはの連休。（『天』）

(128) こんなかすかすの大根を売りつけるなんて……。 (『擬』)

(129) …色とりどりの風車の動きやがらがらのどかな音…。 (『天』)

この種の擬態語は、『浅野辞典』の見出し語には108語あり、全体の13.47%にあたる。羅列すると、次のようになる。但し、例句は『浅野辞典』にはない場合、天沼寧編『擬音語・擬態語辞典』および『和英擬音語・擬態語翻訳辞典』から取ることにした。

3.1 「和語擬音語・擬態語+の」の実態

あっぷあっぷの状態	いらいらの連続
いちゃいちゃの度	うはうはの連休
「うふふ」の…高卒女子	かすかすの大根
がたびしの雨戸	かつかつの給料
がつがつの態度	がっくりのW
がっぷりの左四つ	がばがばの服
がやがやの中	からからの天気
がらがらのキャンパス	がりがりの受験生
ぎざぎざのりょう線	きちきちのくつ
ぎとぎとの油しる	きゅーきゅーの暮し
きゅーきゅーの目 (にあった)	ぎりぎりの車
きんきらきんの仏壇	くしゃくしゃの顔
ぐしゃぐしゃのユニフォーム	ぐずぐずの地層
くたくたの選手	ぐにゃぐにゃの卵
くちゃくちゃのみかんの袋	ぐらぐらのテーブル
ぐちゃぐちゃのグラウンド	ぐりぐりの丸坊主
けちゃんけちゃんの目 (にあった)	
こちこちのM	ごつごつの手
ごだごだのあと	ごわごわのシート

ごりごりのダボシャツ
ざらざらの砂壁
しゃりしゃりの感じ
じめじめ状態の無風状態
しゃなりしゃなりのひま
ずたずたの作業ズボン
そわそわの元議員
たじだしのてい
だぶだぶの手袋
ちゃきちゃきの江戸っ子
どたばたの現象
どろどろのぬかるみ
のらりのらりのうち
ばらばらの管理体制
ばりばりの状態
ぴかぴかの床
びしゃびしゃの雨合羽
ひたひたの湯
ぴったりの愛らしく丸い実
ふかふかのベッド
ぶつぶつの突起
ふらふらの状態
ぶわぶわのスポンジ
ふわふわのアンゴラのセーター
べたべたの手
へとへとに乗客たち

さらさらのほう
じとじとの浴衣
ずばりの予防法
ずぶずぶの雑巾
すれすれのところ
せかせかの日常
汗だくだくの熱演
たっぶりの煮汁
だらだらの上り
つーかーの仲
とろとろのジャム
とんとんの間
ばさばさの砂ばく
ばらばらの入り
ばりばりの浴衣
びくびくのしどおし
びしょびしょの顔
びっしょりの犯人
ひょろひょろの苗木
ふさふさのしっぽ
ぶよぶよの水死体
ぶりぶりの怒り顔
ぺかぺかのアルミ

べったりの親
べとべとの液体

へなへなの枝

へろへろのボール

ほくほくの出版社

ほやほやの焼き芋

むかむかの原因

めめその Nちゃん

もしゃもしゃの髪の毛

元気もりもりの仙人酒

よれよれのジャンパー

ぺらぺらの英語教師

ぼーぼーのところ

ぼさぼさの長髪

ぼろぼろのよう

むんむんの公聴会

よぼよぼのご老人

れろれろの証言

わくわくの婚約者

以上のオノマトペを分析してみると、次のようなことが分かった。

3.2 一回表現のオノマトペには「～の」の形式がないようである。

浅野辞典に出た、「～の＋名詞」の形式を有する 109 語を分析して見れば、「～っ」か「○○り」という一回表現のものが見られない。天沼寧『擬音語・擬態語辞典』には、

ずばりの予防法

がっぷりの左四つ

たっぷりの湯

それにぴったりの愛らしく丸い実

びっしりのほだ

がっくりの W

という例も見られるが、これらはすべて一回表現ではない。

3.3 純粹の、音声を表わす擬音語は、あまり「～の＋名詞」の形式で用いられない。

聴覚に関する和語擬態語にも、「～の＋名詞」の形式を有するものがある、例えば、

(130) 17,8 万円を手にして「うふふ」の入社 2 年目高卒女子…。(『天』)

(131) …流し場などでのがやがやのなかに、ナンセンスさを含んだおしゃべりの断片をとおしてききとれたりするものだ。(『天』)

(132) …とんとんの間は、早すぎても、おそすぎてもいけない。(『天』)

(133) …ぺらぺらの日本語で別れのあいさつをした。(『天』)

(134) そんなれろれろの証言では、かえって彼の犯行が疑われる。(『擬』)
のように、「うふふ」「がやがや」「ぺらぺら」「れろれろ」は「～の＋名詞」の形で用いられているが、ここでは、ただの音声表現ではなく、むしろ、その様子が重点として表わされていると思う。音声を表わす和語擬音語の、「～の＋名詞」形式の例文は、『浅野辞典』、天沼寧編『擬音語・擬態語辞典』および『和英擬音語・擬態語翻訳辞典』にはこの五つしか見られない。

3.4 「～の＋名詞」の形式を有する和語オノマトペには、視覚・触覚および感情に関するものが多い。

筆者の考察では、「～の＋名詞」の形式を有する和語オノマトペは、感覚による意味から分ければ、下の表のように、一番多いのは視覚に関するもので、次は触覚に関するもの、その次は感情に関するものである。言い換えれば、視覚に関するものおよび触覚に関するものは、「～の」の形式になりやすいと言える。

◎「～の＋名詞」の形式を有する和語オノマトペの感覚による意味分類

種 類	語数
視覚に関するもの	48
触覚に関するもの	36
感情に関するもの	17
聴覚に関するもの	5
その他	3

3.5 「和語擬音語・擬態語＋の＋名詞」の深層構造

「の」は「従来連体助詞と言われていた」^⑥。が、奥津敬一郎氏は、述語代用形としての「ダ」形式が連体修飾する場合、次のように、「ダ」が「ノ」に変わったものと解釈している^⑦。

⑥奥津敬一郎「『生成日本文法論』」ペ9。

⑦注⑥と同じ。

(136) 羽田カラ 出発スル 田中サン→

羽田カラ ダ 田中サン→

羽田カラ ノ 田中サン

(136) ホノルルカラ 来タ ジョン→

ホノルルカラ ダ ジョン→

ホノルルカラ ノ ジョン

(137) ソクラテスヲ 研究シテイル K先生→

ソクラテス ダ K先生→

ソクラテス ノ K先生

この解釈は、「和語擬音語・擬態語＋の＋名詞」形式の場合においても通じると
思う。言い換えれば、「和語擬音語・擬態語＋の＋名詞」形式を以上のように
分析すれば、次のように、「の」が述語代用形としての「だ」形式の「だ」から
変ったものと解釈できよう。

(138) あっぷあっぷ 喘ぐ 状態

→あっぷあっぷ だ 状態

→あっぷあっぷ の 状態

(139) がりがり 勉強する 受験生

→がりがり だ 受験生

→がりがり の 受験生

(140) ごわごわ 強張っている シーツ

→ごわごわ だ シーツ

→ごわごわ の シーツ

(141) うはうは 心が踊っている 連休

→うはうは だ 連休

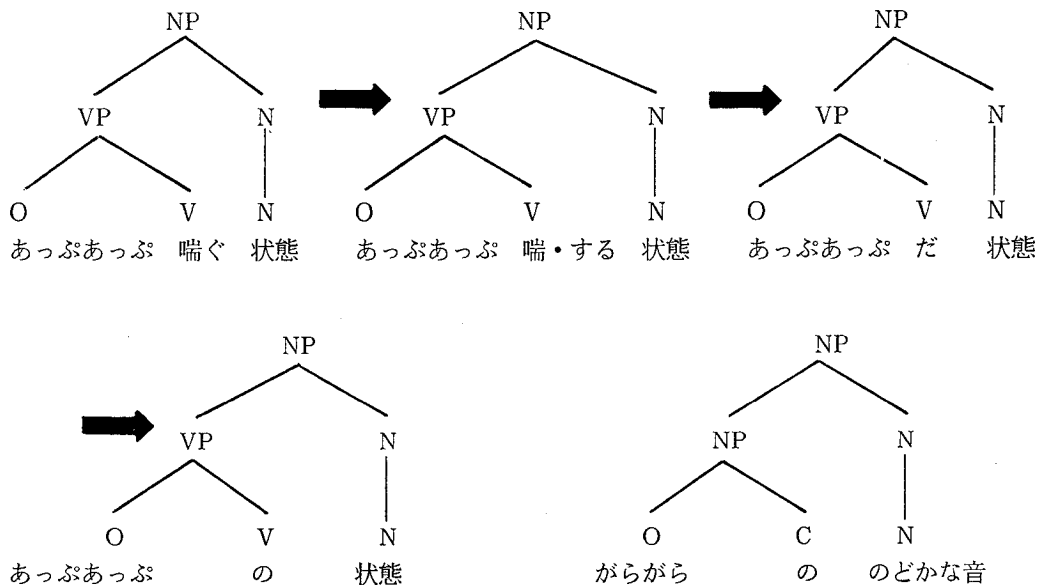
→うはうは の 連休

(142) くしゃくしゃ 皺になった 顔

→くしゃくしゃ だ 顔

→くしゃくしゃ の 顔

事物の名になった語による「～+の+名詞」形式は、上の構造とは違う。例えば、「がらがらのどかな音」の「がらがらの」は、「名詞+の」という体言を修飾する連体修飾成分である。図示すれば、次のようになる。



3.6 品詞論から見た「和語擬音語・擬態語+の+名詞」形式の和語オノマトペ

「和語擬音語・擬態語+の+名詞」形式では、和語擬音語・擬態語は「の」の前に来て、後の名詞を修飾するので、連体修飾成分と言えよう。だが、3.5で見たように、事物の名に転用された語が名詞であるほか、「和語擬音語・擬態語+の+名詞」形式のそれと同じく、形容動詞である。これらのものは、名詞にはならないが、客体的素材概念を表すのである。そして、「十人分かつかつの食糧」の「かつかつ」のようなものは、接尾語である。

3.7 中国語との対照分析

(143) かすかすのカステラ。(『小』)

(乾巴の蛋糕。)

(144) 彼はがばがばの長靴をはいている。(『小』)

(他穿著一雙曠曠蕩蕩的長筒靴。)

(145) 譲歩できるぎりぎりの線。(『小』)

(能够讓步的最大(的)限度。)

(146) だぶだぶの外套。(『小』)

(又肥又大的外套。)

(147) びしょびしょのシャツ。(『小』)

(濕透了的襯衫。)

(148) いちごとろとろのジャムにする。(『小』)

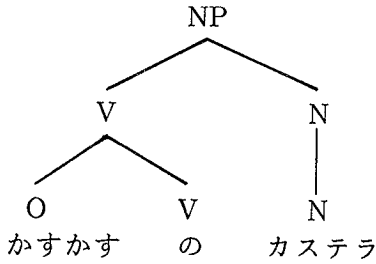
(把草莓熬成黏糊糊的果醬。)

(149) 蜜のようなどろどろの汁。(『小』)

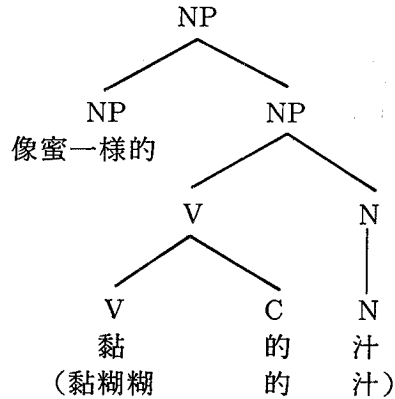
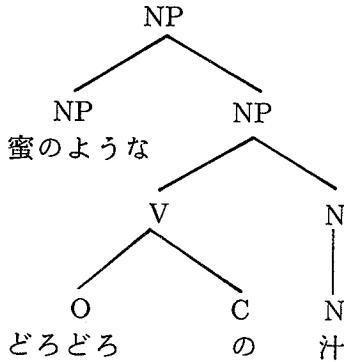
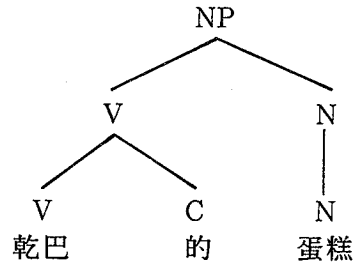
(像蜜一樣的黏汁。)

これらの例文を中国語訳と対照して見れば分かるように、日本語の「擬音語・擬態語+の+名詞」は、「擬態語+な+名詞」と同じように、中国語の「～+的+名詞」と対応している。但し、中国語では「的」が「黏糊糊」「曠曠蕩蕩」というような具体的な敘述力を持っている擬態語の後にきて、形容詞の語尾になるのに対して、日本語では、「の」が述語代用形の「だ」の連体形である。また、中国語では、前にもう一つの「的」がある場合、後の「的」が略されるのが普通であるが、擬態語の場合は、その「的」を略してはならない。図示すれば、次のようになる。

日本語：



中国語.:



4. 「和語擬音語・擬態語+。」の形式

和語擬音語・擬態語は、文の言い切りを表す「。」の前に来ることがある。

筆者が考察した結果は、次のようである。

4.1 和語擬音語にも和語擬態語にも「～。」形式の用法がある。

(150) おじいさんは、かぶをぬこうとしました。「うんとしょ、どっこいしょ。」ところが、かぶはぬけません。(『しょうがくこくご1上』「おおきなかぶ」)

(151) ぶん、ぶん、ぶん。はちがとぶ。

(村野四郎「ぶん ぶんぶん」)

(152) 寒いといっちはあーん、転んだといっちはあーん。(『擬』)

- (153) 難問、奇問で解答者はうんうん。（『擬』）
- (154) 犬はわんわん、ねこはにゃーにゃー、あひるはがーがー。（『天』）
- (155) あまりの鉄面皮ぶりに一同あんぐり。（『擬』）
- (156) A君は勢いよくプールへ飛び込んだ。少しは泳げるのかと思っていたら、たちまちあっぷあっぷ。（『天』）
- (157) 「…でも T 塁審はベースが動かなかったから、踏まぬといい張るんだ」とかっかっ。（『天』）
- (158) 額の真ん中に小さなきびがぶつつ。（『擬』）
- (159) 新教科書にピッタリ。（『くわしい国語文法中学国語』）
- (160) 真剣勝負に胸がドキドキ。（朝日新聞 1990 年 7 月 23 日）
- (161) スズムシ誕生にワクワク。（朝日新聞 1990 年 7 月 22 日）
- (162) 過剰説明にうんざり。（朝日新聞 1990 年 7 月 22 日）
- (163) 風に吹かれて 霧の雨 サラ サラ サラリ（葛原幽「噴水」）
- (164) くるり、くるり。雲雀も舞い舞い、ピッチッチ。（海野厚「輪舞」）
- (165) 上のりの汽車がピーポッポ。（矢野亮「夕焼けとんび」）

上の例を見て分かるように、擬音語にも擬態語にも「～。」形式の用法がある。

4.2 形態から見た場合、すべての和語擬音語・擬態語に「～。」の形の用法がある。

上の例で見たように、

ふん。

あーん。

うんうん。 ワクワク。

あんぐり。 うんざり。

サラリ。 くるり。

かっかっ。 ぶつつ。

あっぷあっぷ。

ピッチッチ。

ピーポッポ。

うんとこしょ、どっこいしょ。

と、一回表現のものにも、連続表現の反復型にも、「ん」で終わるものにも、「っ」で終わるものにも、「り」で終わるものにも、みんな「～。」という用法がある。この点、和語擬音語・擬態語の他の「～だ」「～と」形式とは違っている。

4.3 「和語擬音語・擬態語+。」形式は「和語擬音語・擬態語+用言。」形式とは違うものである。

日本語の基本文型は、

「（主語）——指定の助動詞」型

「（主語）——動詞」型

「（主語）——形容詞」型

の三つであり^⑧、文の成分の位置は、

(166)

<u>夏の太陽が</u>	<u>ぎらぎらと</u>	<u>中学校の校庭を</u>	<u>照り付ける。</u>
主 部	修飾部	修飾部	述 部

のように、主部や修飾部は、述部の前にきて、述部は文の終わりにくる。そして、話の場面や前後のことばの続きぐあいで意味がよくわかる場合、文の成分のあるものを省略することがある。例えば、「どうぞ こちらへ」は「どうぞ こちらへ おいでください」の述部「おいでください」を省略したものである^⑨。

阿刀田稔子氏は、「教師はうろうろ、学生はにやにや」のような表現は、「する」が省略された形である、というように述べている^⑩。そうすれば、「和語擬

⑧林巨樹「文の組み立て」を参照。

⑨『くわしい国語文法 中学国語』ペ226～228を参照。

⑩『日本語百科事典』ペ444を参照。

音語・擬態語+。」で終わる文は、「どうぞ こちらへ」と同じように、何かが省略された文である、というようになる。例えば、

(167) 転んだといっちはあーん。

という文は、

(168) 転んだといっちはあーんと泣き出した。

といった文の「と泣き出した」を省略したものだということになる。しかし、藤田保幸氏が、「兔がピョン」は「兔がピョンと跳ぶ」とは違う、と指摘した^⑪ように、「転んだといっちはあーん。」は、「転んだといっちはあーんと泣き出した。」の「と泣き出した」を省略したものではなく、「それ自体が固有の原理によって成り立っている一つの文だと言ってよい」^⑫。他の例で言えば、

(169) 犬はわんわん、ねこはにゃーにゃー、あひるはがーがー。(『天』)
においては、「わんわん」「にゃーにゃー」「がーがー」それ自体で「犬が吠える」「猫が鳴く」「あひるが鳴く」という意味が表れる。こういう、形式と意味内容の有契性という特性から、和語擬音語・擬態語の、リアルで生き生きした表現ができたのであろう。

「和語擬音語・擬態語+だ」形式は、

(170) うちの子は弱虫でね、何かというとすぐにあーんだ。(『擬』)

(171) 未練どころか、もううんざりである。(『和英』)

(172) 「3人で15日間もかかって植えたのに」と1日じゅうがっくりであった。(『天』)

(173) 「第一、もうお腹がぺこぺこでしょう」(『和英』)

というように、過去の事柄についての表現にもなるし、「もう」という副詞がオノマトペの前にくることもある。それに対して、「和語擬音語・擬態語+。」形

⑪藤田保幸氏「引用されたことばと擬声・擬態語」を参照。

⑫注⑪と同じ。

式は、過去についての表現はないようである。つまり、「転んだってのはあーん。」というような表現は、藤田保幸氏が述べた通り、「臨場的に事柄に向かい合うような場合にしか用いられ」^⑬ないのである（下線は筆者）。

4.4 「和語擬音語・擬態語+。」形式は、書き言葉にも話し言葉にも用いられる。

上の〔173〕例は、「 」に書いてある会話文だから、話し言葉である。そして、〔160〕〔161〕〔162〕例は新聞の見出しで、書き言葉である。このように、「和語擬音語・擬態語+。」形式は、書き言葉だけでなく話し言葉にも用いられることが分かる。

なお、〔151〕〔163〕〔164〕〔165〕例で見たように、「和語擬音語・擬態語+。」形式は童謡などにしきりにもちいられる。言い換えれば、この表現は、幼児の言葉によく出てくるタイプである。このことから、「兔がピョンと跳ぶ」のような構造が先にあって、そこから「兔がピョン」というような構造が派生するという見方は疑問である、と藤田保幸氏が指摘している^⑭。

4.5 中国語との対照分析

中国語にも、

(174) 你不要看他們嘻嘻哈哈。（余綺芳『謝』）

(175) 老烏鴉，刮刮刮！（林良『看圖說話 3』）

(176) 座椅承受不了重壓，發出激烈的嘩嘩喳喳。

(177) （小鴨鴨）走起路來，擺擺擺，唱起歌來，鴨鴨鴨。（林良『看圖說話 1』）

(178) 「嘩、嘩。」汽車的喇叭聲好像在罵他不守規矩。（鄭清文『升』）

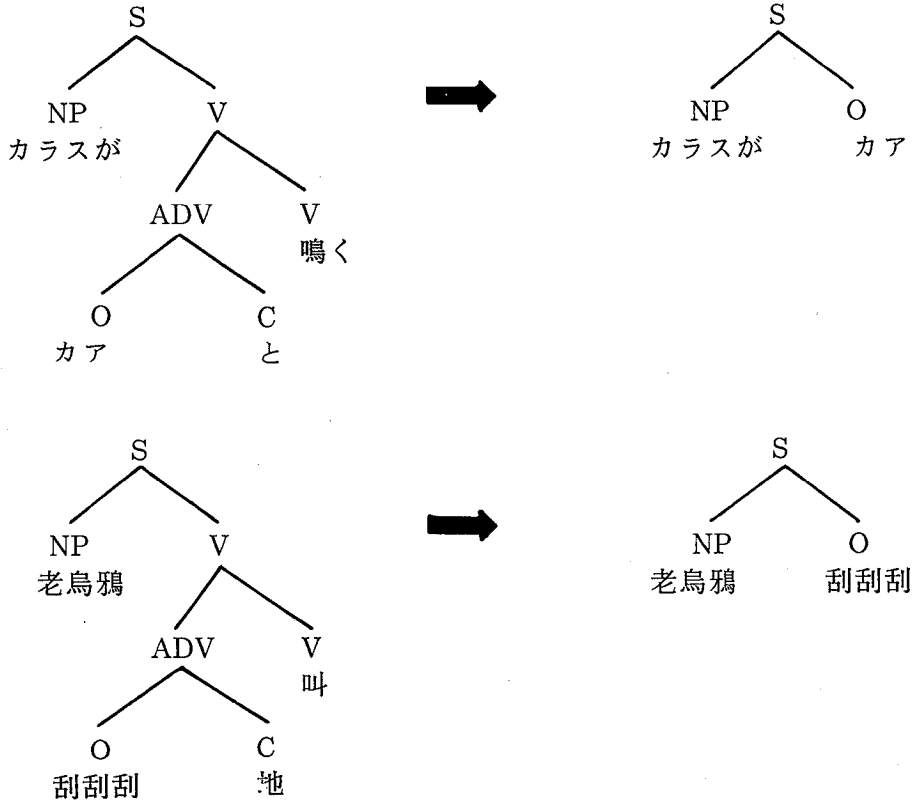
(179) 小樂隊演奏。大家快來聽啊！叮叮噹噹！滴滴答答！好聽極了。（林良『看圖說話 5』）

⑬注⑩と同じ。

⑭注⑩と同じ。

というように、「擬音語・擬態語＋。」形式の用法がある。

〔174〕例では「嘻嘻哈哈」は「嘻嘻哈哈地过日子」の意味になっている。同じように、〔175〕例では、「刮刮刮！」は「刮刮刮地叫」を意味する。これは、「カラスがカア。」と同じ構造である。図示すれば、次のようである。



〔176〕例では「嘩嘩喳喳」は「嘩嘩喳喳的声音」という意味である。〔177〕例では、「擺擺擺」はあひるが歩く様子で、「鴨鴨鴨」はあひるの鳴き声である。そして、〔178〕〔179〕例では擬音語が独立文になっていて、クラクションの音、楽器の音がする事柄全体を直接的に表現しているが、これは、

○「うんこしょ、どっこいしょ。」

○ぶん、ぶん、ぶん。はちがとぶ。

○くるり、くるり。雲雀も舞い舞い、ピッチッチ。

というような日本語の表現と同じである。

しかし、「和語擬音語・擬態語+。」形式が中国語に訳される場合は、下のように、具体的な表現か解釈的になるのが普通である。

(180) (警報器が) …30 分もかんかん。(『天』)

(警報器叮叮噹噹響了 30 分鐘。)

(181) 住民は「……」とかんかん。(『天』)

(住民大發雷霆道：「……」)

(182) ……業者はうはうは。(『天』)

(……業者喜不自禁。)

(183) ……一晩中へやの中をうろうろ。(『天』)

(整晩在屋子裏晃来晃去。)

〔180〕例では、「30 分もかんかん。」が「叮叮噹噹響了 30 分鐘。」になっているが、まだ「かんかん」にあたる擬音語の「叮叮噹噹」が用いられている。それに対して、〔181〕例の「かんかん」は「大發雷霆」に、〔182〕例の「うはうは」は「喜不自禁」に、〔183〕例の「うろうろ」は「晃来晃去」になっている。

このように、日中両国語とも「オノマトペ+。」形式の用法があるが、それぞれの表現が違う。特に、日本語のほうが音声ばかりでなく、サマをも音で表現するのであるから、外国人学習者に難しいのが考えられよう。

5.まとめ

以上考察した結果をまとめて、この論文のむすびとしたい。

(イ) 「和語擬音語・擬態語+だ」の形式の「だ」は、述語代用形である。

(ロ) 「和語擬音語・擬態語+だ」の形式の連体修飾形は、「～+な」と「～+の」と二つある。但し、「～+な」を有するものがわりと少ない。そのかわり、一回表現のものおよび純粹の擬音語を除いて、殆どの和語擬態語には「～+の」という連体修飾形の用法がある。

(ハ) 和語擬音語・擬態語には、臨場的な表現としての「～+。」という用法がある。

(ニ) 「和語擬音語・擬態語+だ」に対応する中国語がいろいろある。擬音語、擬態語のほか、四字熟語が多い。

(ホ) 「和語擬音語・擬態語+な」および「和語擬音語・擬態語+の」に対応する中国語は「～+的」である。

(ヘ) 中国語は和語擬音語、擬態語と同じように、「～+。」の用法がある。

用例出典

- 1) 中田祝夫編『しょうがくこくご1上』
- 2) 浅野鶴子編『擬音語・擬態語辞典(四版)』(略『擬』)
- 3) 天沼 寧『擬音語・擬態語(8版)』(略『天』)
- 4) 藤田孝・他編『和英擬音語擬態語翻訳辞典』(略『和英』)
- 5) 劉 元孝編『永大當代日華大辭典』(略『永』)
- 6) 王家出版社『最新日華大辭典』(略『最』)
- 7) 山口明穂・他『詳解国語辞典』(略『詳』)
- 8) 小学館『日中辞典』(略『小』)
- 9) 小学館『現代国語例解辞典』(略『例』)
- 10) 『くわしい国語文法中学国語』
- 11) 金田一春彦・他編『日本の唱歌(中)』
- 12) 朝日新聞

参考文献

- 1) 浅野鶴子編 1981『擬音語・擬態語辞典（四版）』角川書店
- 2) 天沼 寧 1988『擬音語・擬態語（8版）』東京堂
- 3) 奥津敬一郎 1976『生成日本文法論（再版）』大修館
- 4) 教科研東京国語部会・言語教育グループ 1965『文法教育（二刷）』むぎ書
房
- 5) 金田一京助他編 1972『日本国語大辞典』小学館
- 6) 金田一春彦他編 1979『学研国語辞典（第6刷）』学習研究社
- 7) 金田一春彦他編 1988『日本語百科事典』大修館
- 8) 小泉保他編 1989『日本語基本動詞辞典』大修館
- 9) 田近洵一編 1981『くわしい国語文法中学国語』文英堂
- 10) 水谷静夫編 1988『朝倉日本語新講座 3 文法と意味 I（4刷）』朝倉書店
- 12) 頼 錦雀 1988「中国語と対照する日本語の擬音語」『東呉外語学報 4』
東呉大学
- 13) 井上誠之助 1959「副詞と連体詞」『続日本文法講座 1 文法各論篇』明治書
院
- 14) 林 巨樹 1984「文の組み立て」『研究資料日本文法⑧構文編』明治書院
- 15) 藤田 保幸 1988「引用されたことばと擬声・擬態語と——「引用」の位置
付けのために」『詞林二』大阪大学
- 16) 渡辺 実 1965「品詞論の諸問題——副用語接尾語」『日本文法講座 1総論』
明治書院